

令があった。通信機が故障した場合のためと、班長と二人で民間の家を廻り、よさそうな犬四、五匹を軍命令で連れてき、半年ぐらいで三キロぐらいの電報送受が出来るようになった。それでもまた交信事務に明け暮れたが、毎日敵の空襲があり、危険な日々を過ごしていました。

終戦となって、米軍に兵器・弾薬等を引き渡し、二十年十二月、米軍のフリゲート艦によって旅団司令部は復員のため集結して、十二月二十二日、日本海軍残存の駆逐艦「竹」に乗船、グアム島経由にて浦賀上陸、横須賀で復員、釧路着は奇しくも二十一年一月一日であった。ポナペ諸島周辺配備部隊歩兵一〇七連隊の人員損耗表によれば、ポナペ島の損耗二百五十九名であるとのことあります。

南洋トラック諸島従軍記

富山県 寺 島 武

私は寺島武です。私が初めて昭和十六年三月一日陸軍部隊へ入営しました時の家庭の状況は、

祖母（七十二） 健在 昭和十六年七月八日死亡

父 死亡 昭和四年十一月一日死亡

母（四十三） 健在

妹（十九） 一人 健在

弟（十三） 一人 健在

でありましたが、働き盛りの私が入営すると留守家族は即、生活が苦しいので、部落の人が協力してくれたが、家族とくに母は苦勞をした。私は大変心配でしたが、どうにも出来ぬもどかしさをきつく感じておりました。

昭憲皇太后の御歌に

「子らはみな戦（いくさ）の庭にいでたちて

媼（おうな）な一人島（はた）をたがやす」

若者のほとんどを戦地に送り、さびしく留守をまもる老人たちの姿はあわれだった。とある本で読みました。日清、日露両戦役以来、いやもつと昔から農民の、国民の苦しみを歌ったものです。さて、

昭和十六年三月一日富山市東部第四十八部隊へ現役兵として入営。

昭和十八年十月二十九日兵役解除。即日引き続き臨時召集。十八年十二月十七日まで在隊。

昭和十八年十二月十七日原隊出發。十二月二十四日宇品港より乗船、出航。

昭和十九年一月十一日トラック諸島の七曜島の水曜島オレイ棧橋へ上陸。第五十二師団歩兵第六十九連隊第一大隊第一歩兵砲中隊へ配属。

昭和二十年十二月二十七日浦賀上陸。

昭和二十年十二月三十一日復員。

昭和二十一年一月一日自宅へ帰還。

水曜島へ上陸した私たちの主な任務は、陣地構築でした。昭和十九年二月十九日、約三十〜四十キロ離れ

た四季島の夏島へ移動上陸しました。その当時の戦況は、米第五十八機動部隊が数日前トラック島の攻略を開始し、夏島へ猛爆を加えた。目標は日本軍飛行場です。

当時は、タケ島に戦闘機、カエデ島に雷撃機、ハル島に爆撃機、夏島に水上基地等が配置され、それぞれの飛行場には百以上の飛行機があり、また、トラック島は連合艦隊の基地として「大和」「武蔵」以下の艦艇や司令部要員がいたが、すべて米軍の猛攻のため転進して行つた。残つたのは飛行機とそのパイロットのみです。

三月十八日、敵の夜間爆撃を受け、船舶三十余隻、飛行機百余機の損害を受けたと大本営の発表でしたが、実際はその三倍以上の三百余機といわれました。

私たちは夏島へ転進以来、陣地構築といつても実際は防空壕掘りに毎日従事しました。兵力の損耗を防ぐことを第一として、とにかく敵の猛爆から身を護ることを第二としておりました。その頃の敵の爆撃は機動部隊爆撃でなくて、基地爆撃になつておつたそうです。

三月末よりトラック諸島に対する本格的爆撃が始まり、午前十時頃より午後十時頃まで波状攻撃を受け、特に夏島は海軍の司令部、倉庫、その他重要施設がたくさんあり、全盛を誇っていた頃ですから、夏島が重点的にやられました。コンソリアットB24の四発機でした。夏島にいた私たちはただもう「忍」の一字で、防空壕で退避一方でした。

それから敵の攻撃はサイパンへ移ったが、トラック島への空爆はますます猛烈となり、天長節の四月二十九日から五月二日頃にかけては、もう艦載爆撃機の猛撃一色の連続でした。これに対して日本軍は山の上にある高射砲（満州より来た四門）が応戦するだけです。私の部隊は曲射砲、九十二式歩兵砲、九十四式速射砲、四十七ミリ機動砲で一切飛行機に対しては役に立ちません。防空壕へ逃げるばかり。

私は入隊当初は観測で十九年五月より分隊長、終戦、最終は陸軍軍曹です。結局はサイパンが敵に落ちるまで三、四ヵ月、猛爆のやられ放しでした。もちろん味方の損害もさけることはできず、戦死負傷も出しました。

次に島での食料事情については、初めは内地からの補給食料ですが、補給が制空権、制海権のため駄目になり、倉庫にあるものは猛爆でやられ、在庫品が急速に減少して、基準定量の五割をやっと守る状態です。七百五十グラム―五合の五十%といえど二・五合。そんな少ない食料で作業はむつかしい。ようやく現地自活という「サツマイモ作り」に着手したのは、サイパンが落ちてからのことですから、十九年八月頃からでしょう。南洋の暑い処だから、一年中栽培が出来て年間に三回の収穫があるが、一回、二回目は普通の大きさに育つが、三回目以下は小さくなる。特に夏島には軍人、軍属で何万人もの人がいるので、夏島にばかり頼ってはいけない。

水曜島は大きいから、開拓さえすればより多く採れる。ということでは二十年一月頃に、二十人程の兵を連れて島を出て、イモ作りに専念した。十九年十月より二十年三月頃までが一番食料事情が悪くて、一日につき数十人の餓死者が出たこともある。戦わずして栄養失調です。幸いにしてサイパン陥落後は私の島の

爆撃もなくなり、終日イモ作りか、兵器磨きかです。何しろ海の潮風がまともに強く吹くので、鉄は直ぐ錆びる。毎日磨かないといけない。

高射砲隊では最盛期には一門につき五百発の弾丸を打って敵機に応戦した。島と内地を往復する病院船に、内緒で高射砲の弾丸を積んで来たこともあった。五百発も射つと砲身の螺旋がなくなり、弾丸の射距離と命中率がぐんと落ちてくる。B 29は高空を飛ぶので、ただもう当たらないが、射っておるだけの状況です。私たちの戦場生活としては高射砲隊のみが防戦して、他の部隊はすべて防空壕へ入り、まあイモを作って健康を維持し、敵が上陸して来るのに備えて兵力の消耗を防げとの命令でした。その次は魚をとれとの命令です。兵隊をつれて、舟に乗り魚取りに出る。方法は爆薬しかありません。手榴弾では駄目です。爆薬やダイナマイトを使つてすると、その付近の魚は失神状態で浮いてくる。爆薬は手製で、缶へ火薬、雷管、道火線、時としてダイナマイトも混ぜて点火して投げ込む。まれには不発があり、不発かと思つて接近した瞬間爆発し

て、死亡した悲しい戦友も出ました。これも戦死者です。敵の弾丸に当たつた者ばかりではないのです。

楽しかったことというよりも苦しい中での楽しみは、本島より十キロ位離れた島へ数人をつれてカヌー（巾四尺、長さ四間位）に乗り、爆薬、燃料、水その他を持って行きます。手で漕いだり、風のある時は帆を立てます。原住民は使用しません。朝早く出かけて魚を取り、うまいものは先に食つてしまします。こうしてイモで澱粉質を、魚で蛋白質をとるわけでした。

終戦後は米軍よりの食料補給はなかつたのです。トラック島は食料がないというので、ほかの処に比べて苦しいから、早く引き揚げが開始されました。日本には船が少ないので、米軍の上陸用舟艇（L. S. T.）が使われました。

私は十二月十七日出発し、途中小笠原へ立ち寄りまして、十二月二十七日内地の浦賀へ帰りました。内地は食物は少ないという話でしたが、内地の土を踏めるというので皆喜んで上陸を楽しみにしました。

上陸すると、とたんに消毒用のD. D. Tの散布を

受けたことが強く印象に残っています。元来トラック島は海が近くて潮風が十分なせい、シラミはいなかったが、その代わりに南京虫がおりました。海水でよく水浴が出来たためか、シラミのことはよかったです。南京虫も少しはいたが、幸い私の皮膚は虫に抵抗力があつて助かりました。

最後に最も思い出の深いことといえば、やはりトラック島での空腹の問題です。特に十九年六月頃より二十年三月頃までがひどくて、餓死者が出て、海軍の軍属が沢山亡くなりました。食料が不自由になるに従い、イモの葉を食べました。井戸の真水で葉を煮て、オシタシで食べたり、また葉と茎を細かく切り、イモに入れたりでした。今考えても「よくぞまあ、あの厳しい米軍の猛爆に耐えて生き延びたことよ、よくぞまあ空腹に負けずと健康を保って生き残ったことよ」と、感無量です。

私は漁撈隊に入り、魚を採っては天日で干し、塩漬けにして保存したり、椰子の実を利用した椰子酒に恵まれたりしたおかげで、他の人に比べて格段の差で食

料に恵まれて、元気で帰ることが出来ました。

しかし、同じ島にいた日本人同志の中には餓死した者も多いので、心より相済まぬ気持ちで一杯です。深くご冥福を祈るばかりです。人間どうせ死ぬなら、敵と戦って名譽の戦死をし、手柄を立て、勲章を貰うような勇ましい死に方が理想ですが、栄養失調の餓死とは戦争指導者の作戦方法や兵力の運用の優秀に、疑問を抱くのは私ばかりではないでしょう。

終わりに臨み、世界平和、人類の幸福を強く念じて、悲惨な戦争をしないよう祈ります。

補給なき孤島セラム

茨城県 川田 一櫻

川田さんは現役で近衛歩兵第一連隊へ入られたそうですが、再召集は何処でしたか。

私は大正八年十月一日生れ、昭和十五年一月十日、近歩第一連隊へ入営、九段上の今の武道館のある所で